

高専におけるコミュニケーションスキル教育 ースピーチの実践例を通してー

A Study on Education of Improving Communication Skill in College of Technology
through the Speech Activity in Japanese Class

柴田 美由紀
Miyuki SHIBATA

1. はじめに

高専におけるコミュニケーションスキル教育の必要性が叫ばれて久しい。技術者教育にとってコミュニケーション能力の育成が不可欠であることは、例えば日本技術者教育認定機構 (JABEE) 審査基準の学習・教育目標¹⁾に「論理的思考に支えられた明晰な日本語によって記述し、発表する能力、学会等において討議できるコミュニケーション能力および国際的な場でのプレゼンテーション等の基礎的コミュニケーション能力を持った技術者の育成」と示されている通りである。

こうした状況を受けて高専における国語教育にも見直しが迫られている。見直しには困惑が付き物ではあるが、こうした機会を捉えて高専の国語教育内容のリフレッシュを図るのも一つのやり方かと思う。例えば、コミュニケーションスキルの育成に重点的に取り組むことで、高専独自の国語教育像が模索できないだろうか。高専の1～3年における国語教育には、大学受験のための学習内容に縛られないというメリットがある。それを積極的に生かし、同世代の高校生には得難い学習内容を提供することは、高専の魅力に繋がりうるのではないだろうか。また、国語を中学時代からの苦手科目としてあげる高専生は少なくないが、そうした学生に対して新しい側面から興味を掘り起こす契機ともなりうるはずである。

本稿では筆者が平成15年度に実施を試みた「コミュニケーションスキル強化プログラム」について、スピーチの授業の実践例を挙げながら報

告を行いたい。

2. 「コミュニケーションスキル強化プログラム」について

筆者は平成15年度後期の3年「国語」(通年2単位)の授業において、「コミュニケーションスキル強化プログラム」の試みを行った。対象としたクラスは、電子制御工学科(43名・以下D科と略す)物質工学科(40名・C科)建築学科(36名・A科)の3クラスである。

筆者が担当する3年「国語」²⁾では、平成14年度まで時間数の3/4を日本語学に当てていた。日本語の特徴についての知識の獲得がその目標であった。残りの1/4は、ディベートのゲームに当てていたが、これは表現分野を補うといったかたちであった。15年度は先述の理由から「コミュニケーションスキル強化プログラム」を新たに準備し、後期全てをそれに当てることを計画した。

「コミュニケーションスキル強化プログラム」とは、「聞く」・「話す」経験を重点的に積み重ねることによって口頭表現における言語運用能力の向上を目指すものであり、その内容と時間配分は表1の通りである。

ディスカッション・スピーチについて、筆者としては今回初めての取り組みであったが、ディベートの授業のノウハウから応用できる部分が多くあった。また、時間数から見てもディベートの占める割合が大きい。質的にも量的にもプログラムの核となっているのは、平成2年度から継続的に

表1 「コミュニケーションスキル強化
プログラム」の内容と時間配分

内容	時間配分
導入	1 週 (2 時間)
ディスカッション	1. 5 週 (3 時間)
スピーチ	3. 5 週 (7 時間)
ディベート	7 週 (1 4 時間)
敬語 (手紙の執筆)	2 週 (4 時間)
合計 1 5 週 (3 0 時間)	

実施していたディベートであり、そうした意味ではこのプログラムはこれまでの実践の蓄積を生かすかたちとなった。

年間60時間のなかで、知識の獲得(日本語学)と実践的な訓練(本プログラム)の両方に取り組むのは学生に過重な負担とならないか慎重に判断する必要があった。しかし、年度当初に行った本授業のガイダンスにおいて、年間の授業計画を示し、また日本語能力を高めるためには知識の獲得と実践的な訓練という両面のバランスが大切であると説明したところ、理解を得られたようであった。技術者の資質としてコミュニケーション能力が要求されるという事情も学生達の気持ちを後押ししたようであった。

3. スピーチの授業—準備段階

スピーチを国語の授業に取り入れるにことについてこれまで筆者は消極的であった。複数で行うディベートやディスカッションの場合は個人の露出度は少ない。一方でスピーチの場合は人前でしかも1人で話すスタイルをとるため、学生達が抵抗と負担を感じるのではないかと危惧があったからである。しかし、試行錯誤を続けながら取り組んできたディベートの実践が近年ようやく手応えを得つつある状況から、適切な道案内と十分な事前準備という二つの条件をクリアすれば、どの学生も意欲的にかつ楽しんで口頭発表に臨めることがわかってきた。スピーチもその応用で実践可能との見通しが立ったため、今回のプログラムに加えてみることにしたのである。

スピーチへの抵抗感・負担感を軽減するために、準備段階として班単位でのディスカッション

を行った。質より楽しさを重視したディスカッションで、授業の中にくつろいだ雰囲気と呼び込むのが目的である。教室内が賑やかになり多少制御不能となってもそれでよしとした。ディスカッションの議題はカジュアルなものとした。またブレインストーミングの手法を取り入れることで全員が発言しやすい雰囲気が作り出せたように思う。班毎に議論内容を報告しあうプレゼンテーションタイムも取り入れ、人前に立ち声を出す感触を掴めるようにした。以上の段階を踏まえて10月下旬からスピーチに取り組んだ。

4. スピーチの授業—目標・評価

スピーチの授業にあたり、以下の目標を学生と共有した。

《 話す 》

- ・ 人前に立って声を出す経験をする。
- ・ まとまった内容の話を組み立て、原稿を準備し、持ち時間を意識して発表する。

《 聞く 》

- ・ スピーチの多彩な内容・表現に触れ、クラスメイトの長所に学ぶ。
- ・ 人の話を、集中して聞く耳と、誠実に受け止める態度を養う。

図1 スピーチの授業の目標

全員がスピーチの発表を行うことを前提としたため、特に《話す》方の目標設定は、発表が苦手な学生に配慮して控えめにした。学生達には「背伸びしないで、楽しんでやってみよう」と繰り返し語りかけた。結果的には、目標設定を緩やかにしたことが自由闊達な発表内容につながった印象がある。

スピーチにおける評価は、

《聞く》 《話す》 《話す》

参加点4：内容3：パフォーマンス3

とした。さらに、クラスメイトの投票(2名連記)によりベストスピーカーに選ばれた学生については、上位5名についてボーナス点を加算した。

5. スピーチの授業—実施計画・実施内容

(1) 実施計画

授業のタイトルは「スピーチを楽しもう（スピーチ入門）」とした。時間配分予定と実施場所を以下に示す。

表2 スピーチの授業の時間配分予定と実施場所

	時間数	実施場所
① オリエンテーション	1 時間	HR 教室
② 原稿執筆・リハーサル	2 時間	HR 教室
③ 本番	3.5 時間	視聴覚室
④ 投票・総括	0.5 時間	視聴覚室

おおむね予定通り進行したが、アンケート結果で後述するように原稿執筆時間は個人的ばらつきが大きかった。執筆時間が不足する場合は自宅での執筆となった。また、自宅でないと感じて書けないという学生もいた。

(2) 実施内容

① オリエンテーション

スピーチとは何なのかを説明するため、まず場面のイメージから説明した。

1. スピーチってどんな感じ？

◇場面のイメージ

やや改まった場で、多数の相手に向かって、一定の目的を持って、一定の時間内に、筋道立てて話す……そんな場面をイメージしてみよう。

図2 スピーチのイメージについての説明資料

次に、「皆に聞いてもらえるスピーチにするには何が必要か？」と問いかけて、聞き手の存在に対する注意力を喚起した。

2. Q 楽しく話せる／楽しく聞いてもらえるスピーチにするには？

A 話し手と聞き手の関係づくりをしよう。

(1) スピーチは「相互コミュニケーション」

話し手→聞き手

スピーチは話し手と聞き手の「対面」を前提としたコミュニケーション。

目の前にいる相手をよく見て語りかけよう。

聞き手→話し手

ことばは話し手によって「一方的」に発せられるので、スピーチは話し手だけが担うものと思いがち。しかし、聞き手の表情、うなづき、笑い、涙など、聞き手の様々の反応もスピーチの一部。大切に受け止めよう。

(2) スピーチは「聞き手思い」で

設定＝「どんな場で」「どんな相手に」「何の目的で」話すのか

これらを明確に意識しながらスピーチを準備しよう。料理するとき、相手に美味しく味わってもらうため、状況に応じた調理や盛り付けを工夫するもの。スピーチでも相手に楽しく聴いてもらうために、設定に応じて自分なりの工夫をしてみよう。効果絶大です。

図3 聞き手についての説明資料

② 原稿執筆

今回のスピーチのテーマは、「近頃私が発見したこと、気がついたこと」とし、ささやかな気づき、驚き、感動をクラスメイトと分かち合おうと呼びかけた。タイトルは自由。1人あたりの持ち時間は約2分とした。

スピーチは原稿を用意するものとした。「発表1分あたり原稿300字」を目安に各自執筆に取り組んだ。既に「コミュニケーションスキル強化プログラム」の導入の際に、各自が自分の話す速度について1分間に大体何文字のペースかを確認してあるので、それに基づいて各自で字数を調整する。原稿用紙は1ページ300字のものを筆者が自作し配布した。

執筆作業に入る前に

1. 題材は、身近なものを選ぼう。今回は背伸びなしで行こう。
2. 設定＝「どんな場で」「どんな相手に」「何の目的で」話すのか、を考えよう。
聞き手はあなたの設定した「相手」になったつもりで聞いてくれる(ことになっている)。
3. 文体は「です・ます調」(敬体)で。
4. 率直、明快に話そう。きつとうまく伝えるはず。

原稿執筆の参考に

サンドイッチ方式(結論——分析——結論)
の書き方の一例

- 〈あいさつ〉「皆さん、こんにちは！」
- 〈結論〉「この秋の私の発見、それは……です。」
- 〈分析〉いつ、どのように発見したのか。
発見したことの内容を詳しく具体的に。
- 〈結論〉結論をもう一度述べる。
- 〈あいさつ〉「以上です。ご静聴ありがとうございました。」

図4 執筆についての説明資料

書き上がったら2人1組となり、お互いに原稿の確認を行う。確認事項は、日本語として意味の通らないところはないか、発音しにくい箇所はないか、同音異義語など耳で聞いただけでは意味が取りにくいところはないかの3点である、原稿を確認した上で、パートナーを相手にリハーサルを行い、各自のスピーチ所要時間を計って2分という時間のイメージをつかんだ。

原稿の執筆時間は個人的ばらつきが大きく、原稿確認のためペアを組む段階で多少混乱が生じた。あらかじめテーマを予告し各自プランを練ってきてもらう必要があるが、徹底は難しいと思われる。書き終わった順にペアを組むというやり方

もあるが、出来れば気の合う友人通しで原稿を見せ合いたいというのが人情であり、これも難しい。

筆者は原稿チェックには一切関わらず、発表の当日初めて内容を知るようにした。学生自身が責任を持って自分のスピーチを成立させるよう、自覚を促すためである。事前チェックを行わなかったことから、準備を忘れた、間に合わなかったなどのケースが数件発生したものの、それ以外は自分の出番までに自分なりの準備を整えていた。

発表順はくじ引きによって決め、順番表を教室に掲示した。

③ 発表

発表の会場は視聴覚室(階段教室)・多目的メディアホールとし、演壇にマイクを用意した。HR教室以外を会場とし、マイクを通した音声とすることで、雰囲気演出し学生の集中力を高めるのがねらいである。また、マイクの使用に慣れるのも目的である。

服装は発表の気分が高まるように各自工夫してもらった。また、スピーチ発表中に教室の出入りがあるのは好ましくないので、遅刻厳禁を強調した。

授業1時間あたり約13名が発表を行った。司会進行は最初筆者が行って手本を示し、途中から学生司会(希望者)に交替した。聞き手には「聞き手メモ」用紙を配布し、発表者1人ずつについて発表を聞いた感想を記入してもらった。後ほど発表者本人に読んでもらうという前提をつけたところ、聞き手の学生は発表者との対話をイメージしながら記入している様子であった。3クラスとも、概ね熱心に発表に耳を傾けていた。

なお、11月14日6・7限目C科の授業で公開授業³⁾を行った。本校の教員が4名、観客として学生のスピーチに耳を傾けて下さったことは大いに学生達の励みになったことと思う。

6. アンケート結果から

スピーチの授業の最後にアンケートを実施し、101名(D科36名、C科33名、A科32名)の回答を得た。主な質問内容は次の通りである。

- Q 1. スピーチをするのは何回目でしたか？
(選択式)
- Q 2. 原稿執筆（6百字）について、どれくらいの時間がかかりましたか？（選択式）
- Q 3. 自分でスピーチをしてみて、手応えがありましたか？（選択記述式）
- Q 4. どのような点を改善すると、より充実したスピーチが実現すると思いますか。
(選択記述式)
- Q 5. スピーチを聴いてみて、どのような印象を持ちましたか。（選択記述式）
- Q 6. 今回のスピーチの授業全体の印象について。楽しかったですか？（選択式）
- Q 7. いつか機会があったら、趣向を変えてもう一度やってみたいと思いますか？（選択記述式）
- Q 8. 今回のスピーチの授業について、自由に感想や意見を書いてください。（記述式）

図5 スピーチの授業についてのアンケート

(1) 全体的な印象

Q 8「今回のスピーチの授業全体の印象について、楽しかったですか？」という問いに対して、3クラス全体では85%が楽しかった（とても楽しかった・結構楽しかった）と回答した。C科は91%の学生が楽しかったと回答した。

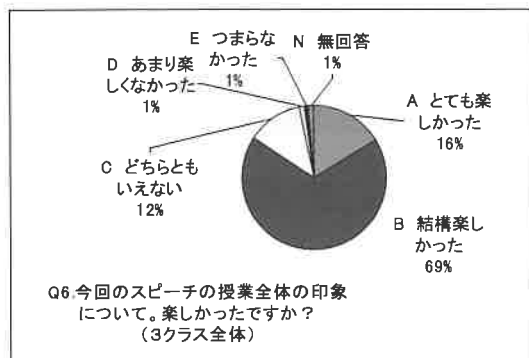


図6 スピーチの授業全体の印象

(2) メンタルな成果

Q 3-①「スピーチをしてみて具体的に何が良かったですか？」という問いには、「緊張しながらも最後まで話すことが出来て達成感があった」

が28%と最も多く、「人前で話す自信がついた」15%、「苦手意識を持っていたが、実際やってみると自分は意外にいけると思った」9%を合わせると52%となる。学生の半数以上が、達成感・自信・苦手意識の克服といった内面の充実を、スピーチを経験した成果として感じてくれたことが読みとれる。

「話す」・「聞く」技術の修得というテクニカルな成果の追求に終始するイメージがある。しかし、「話す」・「聞く」技術の修得を通じて得られるメンタルな成果の側面も看過してはならないだろう。

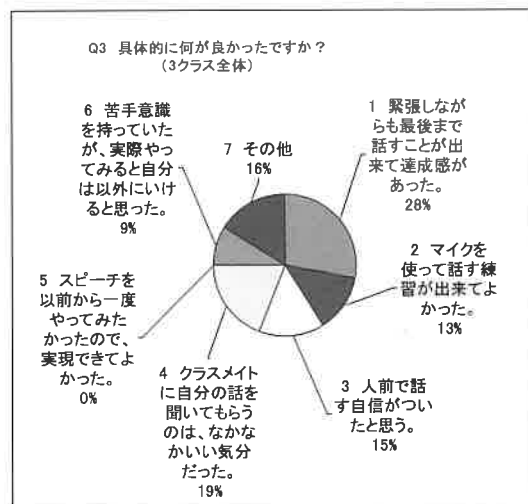


図7 スピーチをして手応えがあったと回答した理由

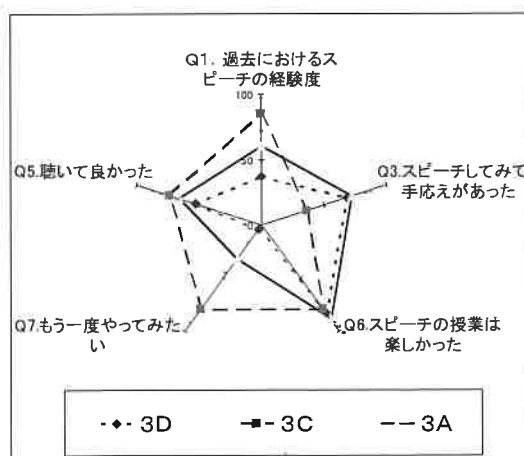


図8 クラス別集計結果(%)

(3) クラス別対応の必要性

図8が示すように、同じように授業を進めたつもりでも反応はクラスによって異なるものであることがわかる。クラスごとの個性を引き出しその長所を生かしたきめ細かい対応が必要であると感じた。

Q1「スピーチをするのは何回目でしたか? (約40人以上の前で、マイク使用で)」という問いについては、クラスによって結果が大きく違った。「初めて」と回答したのは、D科が6割、A科が5割であるのに対し、C科は1割であった。

C科はスピーチの経験が豊富な学生が多く、67%が「3回目以上」と回答している。C科の学生にどういった機会にスピーチをしたのか口頭で質問したところ、「小・中学校時代に学級や生徒会の代表などを務めているとき」ということであった。代表を務めるなかで話すことに慣れ、場数を踏むことで上達してまた代表に選ばれるという連鎖反応があったようだ。回数を重ねることが上達の近道であることを経験的に知っているので意欲的に取り組む学生も多かったように思う。モチベーションは作られるものであると感じた。

Q3「自分でスピーチしてみて、手応えはありましたか?」という問いに対して、3クラスともほぼ4割が手応えあり(大いにあった・少しあった)と回答した。

手応えがなかった(余りなかった・残念ながら全然なかった)と回答したのは、C科が30%と最も多かった。C科の学生が自分のスピーチの出来を不十分と感じたのは、経験を積んでいる学生が多いために各自の到達目標が高いこと、意欲の裏返しによるものと考えられる。そのことを裏付けるのが次の結果である。Q7「いつか機会があったら趣向を変えてもう一度やってみたいと思いますか?」という問いに対して、C科の8割が肯定的に回答(是非やってみたい24%・やってみてもいい55%)している。これは3クラス中最も高い数値であるばかりでなく、他の2クラスと同じ問いに対する肯定的回答の2倍近くに当たる。

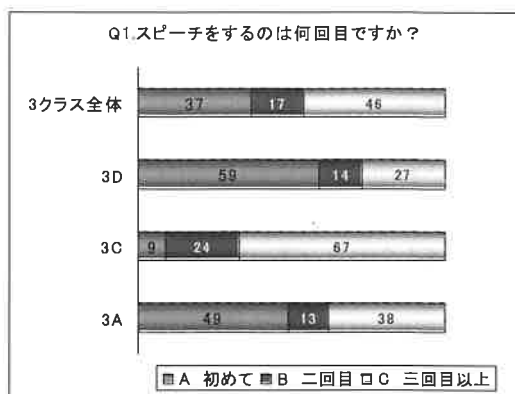


図9 過去におけるスピーチの経験

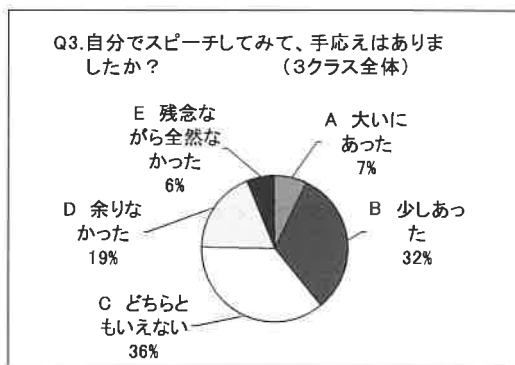


図10 学生の自己評価

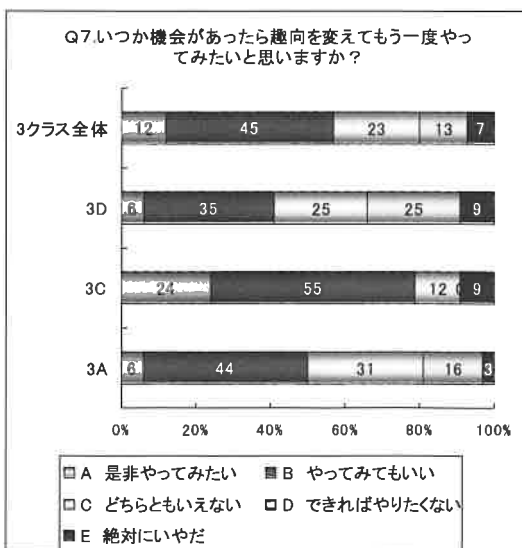


図11 今後への意欲

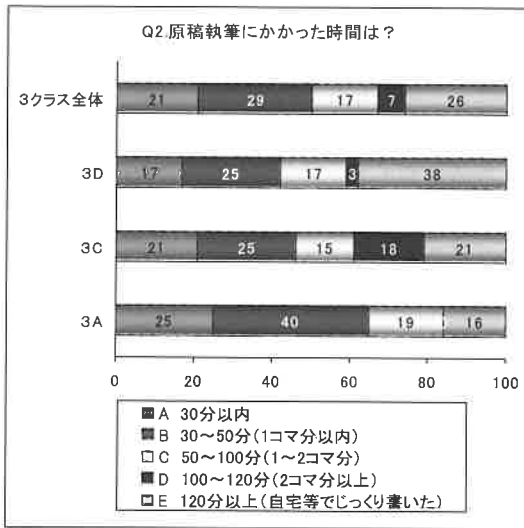


図 1 2 執筆所要時間

(4) デリカシーへの配慮

Q 2 「原稿執筆について、どれくらいの時間がかりましたか？」について、3クラス全体ではちょうど半数の学生が50分以内と回答している。一方で、120分以上かけて自宅で執筆した学生が全体の4分の1を占める。

クラス別にみると3Dでは38%の学生が120分以上かかったと回答している。このクラスでは、原稿用紙を配布してから筆が動き出すまでの時間が大変長かった。書くことが決まってしまう以後の執筆は大変スムーズにみえた。スピーチ本番ではクラスメイトにアピールする内容とパフォーマンスが目立った。時間がかかった学生たちは、執筆にあたって聞き手であるクラスメイトからいかにいい反応を引き出すか思案したのではないと思われる。その甲斐あってスピーチ本番は熱気に包まれたものとなり、聞き手の生き生きとした反応がみられた。一方で、Q 3-②「スピーチで具体的にどのようなところに問題を感じましたか？」という問いに対し、D科は14%が「人前に立つこと自体がつらかった」を選択している点を看過できない。スピーチが不首尾に終わった場合のことを危惧している様子が伺える。個別に発表を行う場合には学生のデリカシーに十分な配慮が必要であることを痛感した。

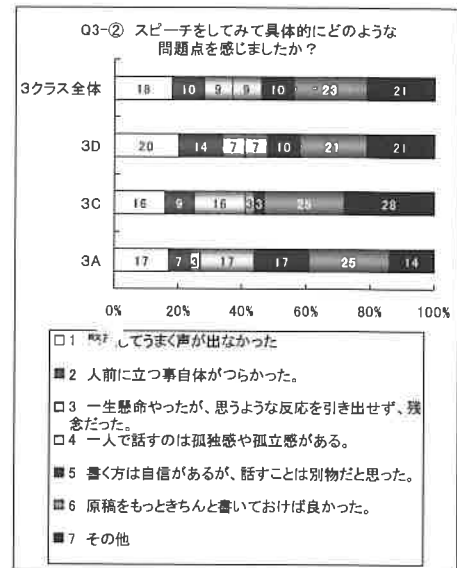


図 1 3 問題を感じた点

(5) 「書く」ことと「話す」こと

最も執筆所要時間が短かったのはA科であった。65%の学生が50分以内書き終えている。もちろん所要時間と書く能力を短絡的に結びつけて考えることは出来ないが、執筆所要時間を書くことの習熟度の目安の一つとして考えることは出来るだろう。A科の学生は製図作業などを通して平素から自分の世界を構築し表現することを要求されていることもあってか、紙の上に自分を表現する能力が培われており、またそこに喜びも感じているようだ。夏休みの課題である読書感想文をほぼ全員が夏休み終了直後に提出していることから、このことは何えよう。しかし口頭発表となると事情は違ってくる。Q 3-②「スピーチをしてみて具体的にどのようなところに問題を感じましたか？」という問いに対し、「書く方は自信があるが、話すことは別物だと思った」を選択したのはA科では17%で、他の2クラスを大きく上回っている。A科では「一人で話すのは孤独感や孤立感がある」と感じた学生が多く、話すことへの抵抗感の一つになっていると考えられるが、こうしたキャラクターを持つクラスには、なるべく和やかでアットホームな雰囲気の中で実施する配慮が必要だろう。「苦手意識を持っていたが、実

際やってみると自分は意外にいけると思った」

(Q3-①)を選択した学生が3クラス中最多の15%だったのは幸いである。今後さらに授業方法を改良し、苦手な学生にこそ最後に楽しかったよかったと感じてもらえる方法を編み出していきたいと考えている。

(6) 準備の大切さ

Q3-②反省点について、「原稿をもっときちんと書いておけば良かった」との回答が最も多く、23%を占める。「話し方、文のつなげ方をアドリブでやろうと思ったが変になった」と書いた学生もいたが、メモを片手に壇上に立ったものの緊張でアドリブが利かなくなったという様子が想像できる。原稿に頼らずメモでスピーチできれば理想的であるが、そのためにはもっと場数を踏む必要があったようだ。

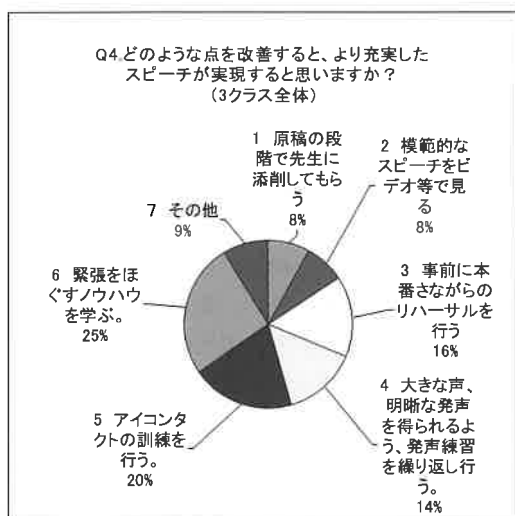


図14 改善すべき点

(7) 緊張というハードル

Q3-②「スピーチをして具体的にどのような点に問題点を感じましたか？」という問いに対して、「緊張してうまく声が出なかった」18%、「人前に立つこと自体がつらかった」10%であった。Q4「どのような点を改善すると、より充実したスピーチが実現すると思いますか？」に対して、25%が「緊張をほぐすノウハウを学ぶ」

を選択している。緊張が最大のハードルになっていることが伺える。「手がふるえた」「死にそうだった」と回答した学生もいた。人前で緊張してしまうのは誰しも仕方のないことである。それでも、呼吸法やイメージトレーニング法によってある程度は緩和できることを知れば、精神的負担も和らぐはずである。今後はこうした手法も取り入れてみたい。

(8) アイコンタクトと発声の訓練

技術的側面の訓練の必要性を感じた学生も多い。Q4の回答では20%が「アイコンタクトの訓練」の必要性を、14%が「大きな声、明瞭な発声を得られるよう、発声練習を繰り返す行う」必要性を指摘している。

アイコンタクトについては、本番で大勢の前に立つとどこを見て良いかわからなくなるといった声が聞かれた。二つの注意点①俯いたままにならないよう注意しよう、②一点を見つめずZの文字を描くように視線を動かしてみよう、を伝えたものの、実際には声を出すことに気を取られて、アイコンタクトにまで気を配れないといった様子であった。クラスメイトのスピーチを聴いているうちに、アイコンタクトで印象が大きく変わること気づかされたことも、アイコンタクトの重要性を知る契機になったようである。

発声については、本プログラムの最初に、五十音図や早口言葉を用いた基礎訓練を行った。その際、なぜ発声練習などするのか、自分たちは当たり前前に声が出るし、またこのようなことを「国語」で練習している同年代の友達はいないのに、といった困惑の表情が学生たちにみられた。しかし、実際にスピーチをしてみると、声にも訓練が必要なのだという事実気づくようである。

アイコンタクトと発声の訓練方法については、演劇団体で行われている訓練法に学ぶ点が多い。今後の課題としたい。

(9) 聴くことの効用

Q5「スピーチを聴いてみて、どのような印象を持ちましたか？」という問いに対し、9割以上の学生が肯定的印象を持ったようである。「みんな

な意外にやるものだ、と思った」31%、「クラスメイトの意外な一面を知った」29%と、クラスメイトがお互いに相手を知り認め合う空気が生まれたのはスピーチ授業の意外な効用であった。クラスのまとまりが良くなったと話してくれた学生や、「みんなの話を激しく感動」「相手のテーマに刺激されて自分を知ることとなった」「クラスメイトの新たな一面を知ったと本当に思う。印象が変わった。一年生の時にもやったらいいかもしれない。」と感想欄に記入した学生がいた。実際に1年の国語でもスピーチの授業を行ったところ、大変な盛り上がりであった。

スピーチを授業に取り入れたのは私の授業では初めてだったため、学生たちの反応が大変気になるところであった。しかし、授業の現場における反応やアンケート結果から、学生たちが充実して取り組んでくれた姿が伺えた。スピーチの授業には筆者の予想以上の効果と将来性があることを実感した。

7. 展望

「コミュニケーションスキル強化プログラム」は、スピーチの実践例でみてきたように、今後の可能性に期待もてるプログラムであることが分かった。今回の試みは3年「国語」に限定したものであったが、今後は、1年から5年までの5年間という縦の線と、教科を横断する横の線を視野に入れ、さらに展開させたいと考えている。

国語という科目は高専の学生にとって重要度の低い科目と認識されることが多く、息抜きの時間のつもりで受講するといった残念な話も漏れ聞こえてくる。しかし、「母国語で考え、書き、話すこと」はどの専門分野においても最も基盤となる能力である。頑丈な土台なくして堅牢な建物は造れない。学生達には国語がこうした基礎中の基礎科目であることを知って是非真剣に取り組んでもらいたいと思う。また教員も国語教育の果たすべき役割を客観的に捉える視点を忘れず、説得力のあるプログラム作りをする必要があると考える。高専における国語教育は、コミュニケーションスキル育成という十分に開拓の余地のある領域を可能性として持っていることを喜び、積極的にアプ

ローチすべきではないかと考える。

参考文献

- 1 「高専における国語コミュニケーションスキル教育の評価と改善 中間報告書」平成14－15年度 国立高等専門学校協会教育方法改善（東北地区高専）共同プロジェクト 2004.3
- 2 「二段構えの国語教育」加田謙一郎（鶴岡工業高等専門学校）論文集「高専教育」第27号 国立高等専門学校協会 2004.3.15
- 3 「日本語学」vol.20 5月号 特集スピーチの研究とその教育 明治書院 2001.5.10
- 4 「話す・聞くの実践トレーニング」全国高等学校国語教育研究連合会 編著（明治書院）2003.1.20

-
- 1) 「日本技術者教育認定基準」（2004 年度版 2003 年 11 月 25 日理事会承認）基準1 学習・教育目標の設定と公開
 - 2) 教科書は尚学図書「現代語」を使用した
 - 3) 平成15年度小山工業高等専門学校 後期公開授業 期間 11 月 10 日～23 日

一般科 miyuki-s@oyama-ct.ac.jp

「受理年月日 2004 年9月30日」

